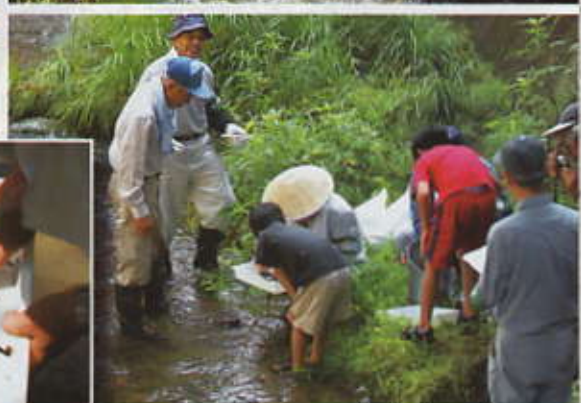


二十五年にわたり

河川浄化を続ける

福島県会津若松市・湯川を美しくする会





八月の暑い最中、恒例の「水生生物による湯川の水質調査」が行なわれた。福島県会津若松市で活動する「湯川を美しくする会」が、毎年この時期、実施しているもので、会が発足した昭和五十五年から始めて、今年で二十五回を数える。調査ポイントは八か所。市街地から車で小一時間ほど登った最上流で、今では無人となつてしまった旧二整地集落の周辺、会津の奥座敷と言われる東山温泉街、そして市街に入り周囲に住宅が立ち並ぶ市街地、工業団地と農村地帯に挟まれ用水路と合流する箇所などである。水温、水深、水量、水域幅といった項目に加え、バケツや網で水や生物を採取する。また、川底の石にこびり付いた藻などをピンセットやナイフで削り取る。川岸の植生や周囲の景観、さらに臭気もメモする。上流では涼しく、途中の隠れた名所である大滝で、一時の涼をとりながらの調査ではあるが、下流にいくにしたがい、気温もあがり炎天下での作業となる。そして、上流では澄んでいた水も、残念ながら、市街地の調査地点に入ると、濁りが見られ、川底の石も黒ずみ、ヒルが付着するようになる。

採取した水や生物は、持ち帰り、専門家の協力を得ながら、さらに分析をすすめる。

湯川は、会津布引山に端を発し、会津若松市街地を貫流している一級河川。その後阿賀川、阿賀野川に合流し、日本海へと注ぐ。市街地を流れる



唯一の河川であることから、生活用水、農業用水として利用され、川沿いは市民の憩い場、子どもたちの格好の遊び場として親しまれていた。しかし、全国の多くの河川と同様に、生活雑排水などの流入により、汚濁が進み、下水同様の川となってしまった。「母なる湯川を汚濁から守り、清浄な川に戻す」ことを目的に生まれたのが同会。市内の町内会などの団体や個人をメンバーとして昭和五十五年十二月に結成された。

以来、今回の調査や清掃活動のほかに、源流域の調査、川沿いにコスモスの植樹、絶滅危惧種になっている会津めだかの飼育・放流、さらには、灯ろう流し、調査データをまとめて環境フェスティバルで発表したり、河川敷に湯川の生物分布を掲載した看板を作成したりと幅広い活動を展開してきた。そのなかで、市民、行政に湯川に関心を寄せ、親しんでもらい、きれいな川に戻すための働きかけをしてきた。

「ここに住んでいても上流や大滝にはめったにいかない。この機会に子どもたちに見せてやりたい」と毎年、お子さんを連れて参加する長尾好章さんは、有機農業をすすめる農家の人。七年ほど前からメンバーになった。「この川の水が農業用水にも使われている。農家としても、おいしいお米ができるかどうかの切実な問題で無関心ではいられない」と参加の動機を語る。そして、今後、行政が

財源不足が進むなか、「私たちのような地道ではあるが息長く調査や市民への働きかけをする活動はますます必要」と訴える。

同会が発足した当初、「会津っ子はもともとまとまりが悪い。早晚つぶれるよ」という声も周囲から聞かれたという。しかし、今年で、二十五周年を迎え、記念行事も予定している。長続きの秘訣を「できることをできる範囲で、無理せずしてきたことかな」と代表の坂内正嗣さんは言うが、必ずしもそれだけではないようだ。調査の最中、ホテルの話で盛り上がった。二、三年前から、住宅街の一角、川沿いに生える葦間から、自生のホテルが見られるようになったというのだ。会話の端々に、ホテルが戻ってきたことのうれしさを抑えきれない様子が伺える。あたりまえのことだが、そんな自然への愛着がやはり活動の原動力になっているようだ。

さて、二十五年前と比べ、湯川はきれいになったろうか。「よくそう聞かれるんだ。たしかに、一時に比べればきれいになってきてはいる。住宅街でホテルがみられるようになったのは、その証し。しかし、まだまだのところもある。これからも調査をし、人々に呼びかけていきたい」と坂内さんは、抱負を語る。同会の活動は、これからも続く。

■連絡先 会津若松市橋本二、一、十三

坂内正嗣さん

